

幼児における賞賛と「存在肯定表現」の発達的影響

井上 洋平

〔抄録〕

子どもを褒めること（賞賛）の重要性は、多くの人の賛同を得られるだろう。一方、子どもの発達やその子どもが生活する文化的規範や大人の価値観をも考慮した場合、単に褒めることを推奨するばかりでは見落としてしまうことがある。本稿では、大人が日々何気なく行っている賞賛や評価に対する子どもの姿の理解を深めるために、以下の三点を中心に検討を進めた。第1に、賞賛・評価・評判を受けとめる上での発達的な基盤となる、他者評価への気づきや理解の発達的变化について確認した。第2に、幼児期から青年期・成人期までの研究を参照しながら、賞賛の意味の発達的变化を個人要因や環境要因を含めて検討した。そして第3に、全人的な発達という観点に立った場合に見えてくる評価や賞賛の他に重視される事柄として、子どもの発達における無条件の関心（unconditional regard）の意味を検討する必要性を指摘した上で、今後の研究課題にも言及した。

キーワード：賞賛、無条件の関心、存在肯定表現、評判管理、幼児

はじめに

ある3歳を迎えたばかりの子どもは、「すごいね」「かっこいいね」といった賞賛や「だめだよ」「やめてね」といった注意をされると、いずれに対しても「ばか、うんち、くそばあ」と返答することが続いていた。保育園の卒園を間近に控えた6歳の子どもは、小学生になりたくない理由として「かわいっていわれたい」と挙げつつ、「かわいいとかっこいいはどっちが良い？」との質問には「どっちも」と応じた。テストで自分の納得のいく点数がなかなか取れない8歳の子どもは、周囲の大人から「がんばることが大事だよ」や「もう十分がんばっているよ」

と声をかけられても、納得がいかないのか浮かない表情のままだった。

大人が日々遭遇する賞賛や評価にまつわる子どもの言動に目を向けると、以下の三点が検討事項として浮上してくる。一つめは、賞賛や評価を受けとめる発達の基盤となる他者評価への気づきや理解の発達の变化を把握することである。二つめは、子どもにとって賞賛がもつ意味を、その発達の变化とあわせて理解することである。そして三つめは、全人的な発達という観点に立った場合に見えてくる、評価や賞賛の他に重視される事柄の有無を検討することである。これら三つの点に関して本稿では、評判管理 (reputation management) や賞賛 (praise)、そして評価的他者意識 (evaluative audience perception) に関する研究 (Botto, Rochat, 2018, 2019) を念頭に置きながら検討を進めていく。

1. 他者による評価・評判の影響とその管理

他者からの評価 (evaluation) や評判 (reputation) に対する子どもの気づきや理解について、近年研究が進んできた。他者評価や評判に対する認識の発達 (Botto, Rochat, 2018, 2019 ; Engelmann, Herrmann, Tomasello, 2012 ; Engelmann, Over, Herrmann, Tomasello, 2013 ; Fu, Heyman, Lee, 2016 ; Heyman, 2020 ; Ma, Zeng, Xu, Compton, Heyman, 2020 ; 奥村・池田・小林・松田・板倉, 2016 ; Repacholi, Meltzoff, 2007 ; Zhao, Heyman, Chen, Lee, 2018) を明らかにすることはもちろん、それらを道徳性の進化に位置づけて理論化を進める研究もある (Tomasello, 2016/2020)。乳幼児期を対象にした過去 30 年および最近の研究から、早くから子どもが視線の向きに敏感であり、視線を手がかりに他者の注意の対象とそれに対する評価を探ることが分かっている (Bott, Rochat, 2018, 2019 ; Kelsey, Grossmann, Vanish, 2018)。

Abdai, Miklósi (2016) が指摘するように、ヒト以外の種を含む個々の研究の文脈では複数の用語 (社会的評価, 評判形成, イメージスコアリング, 社会的盗聴) が用いられ、そしてそれらは一対一や第三者を介する集団において生起する。検討を進めるにあたり本稿では、個人に対する他者の評価 (evaluation) がある集団 (3 人以上) や社会の中で流布し共有されるものを評判 (reputation = social evaluation), 評判を確認・理解することを評判判断 (reputation judgement), 評判を維持・修正することを評判管理 (reputation management) とする。まずは、他者の評価や評判に気づき、その評価や評判の修正・管理を行う 3 歳から 6 歳にかけての発達の特徴を概観する。

評判に関する研究の嚆矢となった Engelmann et al. (2012) は、5 歳前後の子ども (平均 4 歳 11 か月) を対象に、台紙に描かれた形に合致するシールを集めるゲームを、「盗み条件 (他者の有無)」と「手助け条件 (他者の有無)」に分けて実施した。その結果、1 歳年上の同輩 (peer) から見られていると (他者有り), 見知らぬ次の参加児用シートからシールを取る行動は減り (盗み条件), 見知らぬ次の参加児用シートにシールを分ける行動が増えた (手助け条件)。

Engelmann et al. (2013) では、10枚のシールを見ず知らずの誰かに分けるゲームを6歳の子ども(平均6歳7か月)に対して行い、外集団(outgroup)の子どもよりも内集団(ingroup)の子どもに見られている場合により多くシールを配分することが明らかになった。さらに Rapp, Engelman, Herrmann, Tomasello (2018) では、4歳の子ども(平均4.6歳)が今後の評判を気にして振る舞い、5歳の子ども(平均5.4歳)が気前の良い(generous)人として選出されることを一層気にかけて振る舞うことが分かった。

子どもの評判管理を扱った研究が展開する中、Fu, Heyman, Qian, Guo, Lee (2016) は3歳(平均3.6歳)・4歳(平均4.7歳)・5歳(平均5.6歳)の子どもを対象に、クラスメイトからの賞賛の評判(いい子)の伝達が実験者不在時に答えを覗き見することを抑制するのかが検討している。「あなたのクラスの子どもたちが、あなたがいい子だって教えてくれたよ(I know kids in your class and they told me you are a good kid)」および「玩具を覗いているところを見つけたらクラスの子どもたちに言うからね」と伝える評判条件とそれらには言及しない統制条件では、5歳の評判条件でのみ答えを覗く行動が減少した。また、覗くことでもたらされる否定的な結果(覗いたことを他児に教える)や覗かないことの期待(expectation)を伝えると、期待を伝えた場合には我慢する時間が長くなったもののいずれの場合も覗く行動は減少しなかった。

「いい子」⁽¹⁾ではなく「かしこい」という評判を与えて、数字の推測ゲームで答えを覗くことへの影響を検討した Zhao et al. (2018) の研究もある。3歳(平均3.6歳)と5歳(平均5.5歳)の子どもに対して、クラスの子どもや先生からの「かしこい子(smart kid)」という評判や無関係の評判(「清潔にしている子ども(clean kid)」)を伝える場合、あるいは一切評判を伝えない場合で検討したところ、「かしこい」評判を伝えられると3歳でも5歳でも覗く行動が他の場合よりも多くなり、男女差(男児>女児)も確認された。また、「かしこい」評判を伝えたもののその人が不在の場合の実験では、「かしこい」評判を伝えた人が目の前にいる時よりも覗く行動が減少した。

これらの研究は直接自らに向けて発せられた評価や評判を聞いた幼児の反応を扱ったものであるため、Zhao, Chen, Sun, Compton, Lee, Heyman (2020) は大人同士による他児への評価(「〇くん/ちゃんはかしこい子だね」)を小耳にはさむ条件と室温を話題にする統制条件を設定し、3歳(平均3.5歳)と5歳(平均5.5歳)を対象に Zhao et al. (2018) の数字の推測ゲームを用いた評判の影響を検討した。その結果、3歳では条件間の差はなく、5歳では他児が「かしこい」ことを耳にすると実験者が不在の間にカードを覗く行動が多くなり、男女差(男児>女児)も確認された。類似の結果は、他者への分配を扱った研究でも示されている(Qin, Zhao, Compton, Zheng, Mao, Zheng, Heyman, 2021)。

一連の研究から、5歳にもなると他者からの評価や評判に応じて自らの行動を修正・変更することが明らかになっている。Engelmann et al. (2012, 2013) のように、他者の存在自体が向社会的(prosocial)あるいは道徳的(moral)といわれる行動に子どもを促す場合もあるが、「い

い子」という評判を意識して覗く行動が減少したり（Fu, Heyman, Qian et al., 2016）, 「かしこい子」という評判のために覗く行動が増えたりもする（Zhao et al., 2018）。そしてその影響は、大人同士の会話における他児への評価を耳にはさむ場合でも子どもの行動を変えうるものであった（Zhao et al., 2020）。これらの研究では比較条件として他者からの期待が設定されているが、「助ける人になってね（be helpers）」と「助けてね（to help）」の影響を検討した Foster-Hanson, Cimpian, Leshin, Rhodes (2020) では、期待を伝えた後に助ける行動がうまくできなかった場面をごっこ遊びの文脈で提示すると、「助ける人になってね」と伝えた場合に援助行動が減少することや簡単な内容の時に増加することが明らかになっている。また、満足遅延課題（実験者が戻ってくるまで待つておく追加のステッカーが手に入る）の結果が友だちや先生には分かると教示した条件では、3歳から4歳の子ども（平均4歳台）の待ち時間が長くなるという研究結果もある（Ma, Zeng, Xu, Compton, Heyman, 2020）。こうした大人の発する評価や期待さらにはプレッシャーが及ぼす影響や効果を検討するにあたり、評判管理研究の言語教示に含まれる賞賛に関する先行研究の知見（Zhao et al., 2020）が有用である。

2. 賞賛の意味の発達的变化

他者評価の一つとして冒頭で紹介した類の賞賛を大人は頻繁に行っており、それらは先行研究（Reissland, 1994；Muller, Dweck, 1998；Kamiss, Dweck, 1999；青木, 2005；Cimpian, Arce, Markman, Dweck, 2007；Skipper, Douglas, 2012；Zentall, Morris, 2012；Morris, Zentall, 2014）を通じていくつかのタイプに整理されてきた。人物そのもの（全体）や能力・特性を褒める「人物賞賛（person praise）」や「能力賞賛（ability praise）」、採用した方略や結果に至るまでの過程あるいは努力を褒める「プロセス賞賛（process praise）」や「努力賞賛（effort praise）」、そして出来栄などを褒める「結果賞賛（outcome praise）」があり、人物賞賛や能力賞賛は「包括賞賛（generic praise）」、プロセス賞賛や結果賞賛は「個別賞賛（non-generic praise）」に分類される（Table1）。それでは賞賛の及ぼす影響は、子どもの発達とどのような関係にあるのだろうか。

Table1. 賞賛の分類（概要）

包括賞賛 (generic praise)	人物賞賛 (person praise) 能力賞賛 (ability praise)
個別賞賛 (non-generic praise)	プロセス賞賛 (process praise) 努力賞賛 (effort praise) 結果賞賛 (outcome praise)

(1) 幼児に対する賞賛の影響

子どもに及ぼす賞賛⁽²⁾の影響を扱っていたそれまでの研究が不問にしていた失敗 (setback) 後への影響を検討した Mueller, Dweck (1998) や Kamiss, Dweck (1999) は、近年の研究の出発点となっている。それ以前の研究から、成功している間は人物賞賛もプロセス賞賛も子どもの効力感 (sense of efficacy) を促すことを示していたものの、失敗前に与えられた賞賛が失敗後の行動や感情にどう影響するかは分かっていなかった。

Kamiss, Dweck (1999) は5歳の子ども (平均5歳6~7か月) を対象に、ふり遊びの文脈での描画場面を設定しながら、失敗と成功に対する評価 (批評・賞賛) を人物 (person)・結果 (outcome)・過程 (process) の観点から行い、その後の様子を複数の点 (出来栄え, 自己イメージ, 悲喜の感情, 根気) から検討した。その結果、ふり遊びの文脈であっても描き忘れを指摘される (失敗) と、人物批評や人物賞賛を受けた子どもは結果や過程を評価された子どもよりも無力感を感じるようになった。Cimpian, Arce, Markman, Dweck (2007) は、包括賞賛 (「絵が上手だね (You are a good drawer)」) と個別賞賛 (「上手に絵を描いたね (You did an good job drawing)」) の間にある微妙なニュアンスの違いが失敗後に与える影響を、Kamiss, Dweck (1999) の方法を利用して4歳の子ども (平均4歳6か月) を対象に検討した。その結果、失敗前のエピソードを嬉しく感じるかどうかの評定平均と、失敗した次の日 (実験課題上の設定) に再度絵を描こうとする子どもの割合が、個別賞賛を受けた子どもでも高いことが示された。

ただし、日常場面や自然観察場面を念頭に置いた場合、子どもは特定の賞賛のみを経験するわけではない (Reissland, 1994; Gunderson, Gripshover, Romeo, Dweck, Goldin-Meadow, Levine, 2013)。Zentall, Morris (2010) は、Cimpian et al. (2007) の手続きに倣いつつ5~6歳 (平均5.7歳) の子どもを対象に、包括賞賛と個別賞賛の比率を5段階 (0/4, 1/4, 2/4, 3/4, 4/4) に分けた上で失敗後の影響を検討した。1回でも個別賞賛を受けていると4回とも包括賞賛の時よりも自己評価が高くなり、個別賞賛を3回または4回受けていると1回または0回の時よりも根気強いことが示された。さらに個人内での関連 (自己評価の高低×根気の高低×個別賞賛を受ける回数) を検討すると、低低群 (自己評価低・根気低) は個別賞賛が0~1回に、高高群 (自己評価高・根気高) は個別賞賛が3~4回に、高低群 (自己評価高・根気低) は個別賞賛が3~4回よりも0~2回にそれぞれ集まり、低高群 (自己評価低・根気高) は個別賞賛の回数に差はなかった。

また、賞賛の方法に目を向けてみると、言語による明示的な賞賛 (人物賞賛や努力賞賛) だけでないことが分かる。Morris, Zentall (2014) は、「うん/そうだね (Yea)」といった「曖昧な賞賛 (ambiguous praise)」やサムズアップやハイタッチといった「ジェスチャー賞賛 (gestural praise)」も加え、5歳 (平均5.7歳) の子どもを対象に失敗後の影響を検討した。曖昧な賞賛やジェスチャー賞賛は、根気強さについては努力賞賛と同程度、失敗後の自己評価の面では努

力賞賛以上に肯定的な影響を及ぼす結果が示された。また、曖昧な賞賛やジェスチャー賞賛の意味を子どもにたずねたところ、人物賞賛に該当する内容を回答した子どもは一人もおらず、子どもがそれらを結果の賞賛や賞賛した人の幸せな気持ちを伝えるものとして理解していることが分かった。

これらの研究は実験場面での賞賛の短期的影響を扱ったものだが、自然観察場面を対象とした賞賛の中・長期的な影響を検討した研究もある（Gunderson et al., 2013）。Gunderson et al (2013) は、14・26・36 か月の定点観察および5年後のフォローアップ調査を行い、幼児期前半にプロセス賞賛が相対的に多いと、7～8歳時点で能力や属性の可塑性を信じる「増大フレームワーク（incremental frameworks）」を発達させやすいことが確認された。一方で、賞賛に占める人物賞賛の比率が年齢とともに減っていくこともあり、人物賞賛が能力や属性の不変性を信じる「能力固定フレームワーク（fixed-ability frameworks）」につながる結果は示されなかった。またこの研究では、保護者の発言全体に占める賞賛の比率に男女差はなかったものの、女兒は男児に比べてプロセス賞賛がどの時期にも少ないというジェンダーの差⁽³⁾が示された。

以上のように、賞賛の種類による失敗後への影響は一貫した結果を示しており、その理由は以下のように考えられている（Cimpian et al., 2007；Gunderson et al., 2013；Kamiss, Dweck, 1999；Lam, Yim, Ng, 2008；Morris, Zentall, 2014；Muller, Dweck, 1998；Zentall, Morris, 2010）。能力や特性といった固定的で変化しにくい側面を評価する能力賞賛や人物賞賛を受けた子どもは、失敗によりその評価されたはずの固定的な能力や特性を実は備えていないのかもしれないと思い、自己評価や粘り強さが低下するものと考えられる。一方、採用した方略や取り組みの過程や努力を評価されたプロセス賞賛や努力賞賛を受けた子どもは、失敗の理由が自らの能力や特性の不足にあるのではなく用いた方略や努力が十分でなかったのだと思い、能力賞賛や人物賞賛を受けた子どもに比べて自己評価や根気が低下しないと考えられる。それは曖昧な賞賛やジェスチャー賞賛が失敗に対して肯定的な影響を及ぼす場合にも同様である（Morris, Zentall, 2014）。

(2) 小学生・中学生・高校生に対する賞賛の影響

幼児を対象とした研究に基づけば、人物賞賛や能力賞賛が否定的影響を及ぼし、プロセス賞賛や努力賞賛が肯定的影響をもたすといえる。しかしながら、主に小学生から高校生までを対象とした研究結果からは、賞賛の影響を発達的に吟味する上で重要な知見が数多く得られている（青木, 2005, 2009, 2012；Brummelman, Nelemans, Thomaes, Orobio de Castro, 2017；Brummelman, Thomaes, Orobio de Castro, Overbeek, Bushman, 2014；Brummelman, Thomaes, Overbeek, Orobio de Castro, Van den Hout, Bushman, 2014；Lam et al., 2008；Lee, Kim, Kesebir, Han, 2017；Muller, Dweck, 1998；Skipper, Douglas, 2012；高崎, 2018）。

たとえば Skipper, Douglas (2012) は、客観的事実を伝えるだけでも賞賛と同様の効果があ

ることを、小学生(平均9歳8か月)と大学生を対象とした実験で明らかにしている。それ以前の研究では、評価的でないフィードバック(客観的事実)を受けた時との比較がなされていなかったため、人物賞賛やプロセス賞賛を客観的結果のフィードバック(objective outcome feedback)が与えられる統制群との間で比較が行われた。自らを主人公に想定したシナリオの中で子どもは、教育課題に成功して3種類の評価(人物賞賛・プロセス賞賛・客観的結果のフィードバック)のいずれかを得た後、課題に失敗するシナリオを2回にわたり読んだ。1回読むごとに出来ばえ・感情・根気を評価したところ、1回目の失敗後では、人物賞賛を受けた場合のみすべての従属変数で否定的な反応があったものの、客観的事実をフィードバックする統制群はプロセス賞賛群と差がなかった。ただし、2回目の失敗後にはフィードバックに関係なく否定的な反応がより確認された。

様々な種類の賞賛⁽⁴⁾がある中、大人はどの子どもにも同じように賞賛を与えているのだろうか。また同じ種類の賞賛であればどの子どもにも同じように作用するのだろうか。Henderlong, Leppar (2002)が指摘するように、賞賛の影響は個々人の諸要因に左右される。

香港の中学1年生(中等学校7年生)を対象とした研究(Lam et al., 2008)は、努力と能力の関係についての信念の違いにより努力賞賛の影響が異なることを明らかにしている。具体的には、能力の高さは努力の多さと関連する(たくさん努力したから能力も高い)という信念を保持していると、努力賞賛を受けることが動機づけとなり、努力の多さが能力の低さと関連する(能力が低いから努力をたくさんする)という信念を保持していると、努力賞賛を受けることが意欲を損なわせるという結果が得られている⁽⁵⁾。

Brummelman, Thomaes, Overbeek et al. (2014)は、保護者(平均42.9歳)を対象としたオンライン調査(自尊心の高低が推測可能な8歳~13歳の架空の子どもを想定)を実施し、自尊心(self-esteem)の低い子どもに人物賞賛、自尊心の高い子どもにはプロセス賞賛や「すごい!(great!)」といったその他の賞賛を保護者がよく与えることを明らかにした。また、8歳から13歳の子ども(平均10.4歳)を対象にしたオンライン反応時間ゲームを利用した実験では、人物賞賛をされた後の失敗は他の賞賛をされた後の失敗に比べて恥ずかしさが増加し(成功後は賞賛の種類による違いは認められず)、自尊心の低い子どもが人物賞賛を受けた後に失敗を経験すると恥ずかしさが増加することが分かった。

そしてBrummelman, Thomaes, Orobio de Castro et al. (2014)は、大人が子どもの自尊心を高めることを意図して行う「大げさな賞賛(inflated praise)」の影響を検討している。Brummelman, Thomaes, Overbeek et al. (2014)と同様の手続きで、子ども(自尊心の高低が推測可能な8歳~13歳の架空の子どもを想定)に対する大人(平均41.4歳)の褒め方を分類したところ、賞賛の25%が「大変よくできたね!(Very well done!)」「素晴らしい絵を描いたね(You made an excellent drawing!)」といった大げさな賞賛であった。その際、自尊心の高い子どもへの賞賛の18%が大げさなものであったのに対し、自尊心の低い子どもに向けた

賞賛の33%が大げさなものであった。また家庭での課題実施場面（5分間）における親（平均43.4歳）と子（7歳～11歳：平均8.7歳）のやりとりを分析したところ、自尊感情の低い子どもは大げさな賞賛を受けることが予測された。さらに子ども（8歳～12歳：平均9.9歳）が「専門家（実験上の設定）」から受ける賞賛の影響を検討した結果、大げさに褒められる（You made an incredibly beautiful drawing!）と自尊感情の低い子どもはその後の難しい課題（絵）への挑戦を躊躇する一方、大げさでない形で褒められる（You made a beautiful drawing!）と自尊感情の低い子どもが難しい課題（絵）に挑戦することも確認された。

さらに Brummelman et al. (2017) では、7歳から11歳の子ども（平均8.9歳）とその親（平均43.3歳）を対象に、大げさな賞賛の自尊感情への中期的影響（1年半）を検討し、自尊感情の低さが大げさな賞賛を促し、その大げさな賞賛がさらに自尊感情の低下を導くとする「自己デフレーション（self-deflation）仮説」を支持する結果を得ている。他方、自尊感情の高さが大げさな賞賛を促し、その大げさな賞賛がナルシズムを導くとする「自己インフレーション（self-inflation）仮説」⁽⁶⁾については指示されなかった。しかし、もともと自尊感情の高い子どもに大げさな賞賛が行われた場合にナルシズムを導く結果も示され、自己インフレーション仮説を一部支持するものとなった。

これら大げさな賞賛の影響からも分かるように、子どもの言動を適度に褒めることは重要な要因と考えられる。Lee et al. (2017) は、賞賛の与え手である親（平均44歳）と受け手となる子ども（8歳から11歳）それぞれを対象に、（与えている／受けている）賞賛の正確さに関する意識を調べ、成績（GPA）や心理的健康（抑うつ）との関連を検討している。その結果、学校の勉強を親からやや過度にまたは適切に評価されていると思っている子どもは、GPAが高く抑うつが低いことが分かった。また、子どもに対する賞賛の親自身による評価と子どもによる評価の相関が弱く、子ども自身の受けとめ方が重要であることが示された。

さらにいえば、褒める側と褒められる側が賞賛を同じ意味で捉えている訳ではない。高崎(2018)は、中学生（平均13.9歳）・高校生（平均16.2歳）・大学生（平均19.1歳）・成人（平均42.9歳）を対象に、賞賛に対する認知的枠組（「ほめへの態度」）の発達の変化および認知的枠組の形成要因を検討している。その結果、他者に認められて人は育つと考える「承認重視」や褒めるタイミングを考える「用い方重視」といった認知的枠組が、発達とともに強まることが明らかになった。また、褒められた経験だけでなく褒めた経験が、賞賛に対する認知的枠組の形成に影響を及ぼしていることが示された。

賞賛のタイプによりその影響が異なる点を明らかにしてきた幼児対象の研究とは異なり、小学生以降を対象とした研究からは「誰（大人）が」「誰（年齢・自尊感情の高低・属する文化圏）の」「何（能力・人物・努力・過程・結果）を」「どのように（大げさかどうか・過不足なくかどうか）」褒めるかによって影響が異なることが分かる。例えば、幼児に対する賞賛の方法として好ましいとされるプロセス賞賛や努力賞賛であったとしても、褒められる子どもが保持す

る能力と努力の関連についての信念（例：能力が低いからたくさん努力をする）によっては、否定的なメッセージとして解釈される可能性がある（Amemiya, Wang, 2018；Lam et al., 2008）。また自尊感情を高めようと意図して行われる大げさな賞賛も、自尊感情が低い子どもにとっては逆効果であり（Brummelman et al., 2017；Brummelman, Crocker, Bushman, 2016；Brummelman, Thomaes, Orobio de Castro et al., 2014；Brummelman, Thomaes, Overbeek et al., 2014；Heyman, 2020）、むしろ適度に褒めたり（Lee et al., 2017）客観的事実を伝達する（Skipper, Douglas, 2012）ことの方が重要といえる。こうした幼児期との差異は、相手の意図を探って言われた内容の意味を理解しようとする心の動き（入れ子式の心的状態の理解）にも依拠している（溝川, 2018；Mizokawa, Lecce, 2017）。

(3) 賞賛する側 (praiser) に対する賞賛の影響

ここまで見てきたように、賞賛に関する先行研究の多くはその行為の性質上、褒められる人 (praisee) に及ぼす影響を明らかにしてきた。一方、褒める行為が賞賛に関する自らの認知的枠組に再帰的な影響を及ぼすことを高崎 (2018) が指摘しているものの、褒める人 (praiser) への注目は決して高くなく関連する研究も非常に少ない。

Kakinura, Nakai, Hada, Kizawa, Tanaka (2020) は、“Saying is believing”⁽⁷⁾ (Higgins, Rholes, 1978) や他者に対する援助行為が自らに再帰的な影響を及ぼす研究 (Dore, Morris, Burr, Picard, Ochsner, 2017)、さらに説得研究 (Janis, King, 1954) などを考慮しながら、従来の研究では見過ごされてきた褒める人自身への影響を大学生 (平均 19 歳) 対象に検討している。一連の実験から、能力賞賛を行う頻度が高いと「成長マインドセット⁽⁸⁾ (growth mindset)」が低くなること (研究 1)、事前の成長マインドセットが低いと能力賞賛を行った後の失敗経験が成長マインドセットに負の影響を及ぼすこと、能力賞賛を行った後に失敗を経験すると課題の楽しさが低下し、その後のテストの出来ばえにも間接的に影響すること (研究 2)、実際に他者を褒める条件下で実験を行うと成長マインドセットと能力賞賛の交互作用は認められず、能力賞賛を行った後に失敗を経験すると課題の楽しさが低下することが再度確認された (研究 3)。

さらに Kakinuma, Nishiguti, Sonoda, Tajiri, Tanaka (2020) は、現実の状況に近づけるべく大学生 (平均 19 歳) を対象とした対面によるコミュニケーション場面を設定している。他者を褒めた後に経験する失敗に起因する課題の楽しさについて、自己申告と行動指標 (注視点と注視時間) により検討している。その結果、他者に能力賞賛を行った後で失敗を経験すると、それをしない統制群に比べて注視数と注視時間が少なくなった。このように、褒められる人に対して明らかにされてきた能力賞賛の影響が、褒める人にも再帰的に及ぶことが明らかにされつつある。

賞賛を行った人への再帰的影響は、その研究が端緒についたばかりであるものの、大人側の考え方や価値観およびそれに由来する日々の子育てが、子どもに及ぼす影響については研究が

進みつつある（Bornstein, Putnick, Park, Suwalsky, Haynes, 2017；Ng, Ng, Pomerantz, 2021；Ng, Xiang, Qu, Cheung, Ng, Wang, Pomerantz, 2019）。Ng et al.（2019）は、文化や価値観の異なる米中二国間の保護者（中国：平均 39.1 歳，アメリカ：41.3 歳）と子ども（中国：平均 12.6 歳，アメリカ：平均 12.7 歳）を対象に、子育ての目標と子どもへの関わり方が子どもの心理状態（不安や抑うつ）に及ぼす影響を比較・検討している。調査の結果、中国の母親がより重視する常に努力を続ける「自己改善目標（self-improvement goals）」は、子どもの上手いかなかった点を指摘する「失敗志向反応（failure oriented responses）」⁽⁹⁾の頻度や子どもの情緒的苦悩（emotional distress）の高さを、アメリカの母親がより重視する自尊感情の形成を促す「自己価値目標（self-worth goals）」は、「成功志向反応（success-oriented responses）」の頻度や子どもの情緒的苦悩の小ささを、それぞれ予測するものであった⁽¹⁰⁾。

一方で、文化や価値観によって異なる子育ての目標や子どもへの関わり方の可変性を示す研究もある。Ng et al.（2021）は母親（アメリカ：平均 40.2 歳，香港：43.3 歳）に対して、自己価値または自己改善が論理的推論（logical reasoning）にとって重要だと聞いた後の子ども（アメリカ：平均 10.1 歳，香港：平均 10.3 歳）への関わりを実験的に検討している。その結果、自己価値が重要だと聞くとアメリカでも香港でも母親はより成功志向反応を示し、自己改善が重要だと聞くとアメリカの母親のみがより失敗志向反応を示した。

これらの研究から、他者とのコミュニケーションとして行われる賞賛の性質について、以下の2点が明らかとなった。一つは、賞賛は褒められる人はもちろん褒める人にも再帰的に影響を及ぼすことであり（Kakimura, Nakai, et al., 2020；Kakinuma, Nishiguti, 2020）、もう一つは、子どもを褒める側となる保護者が持つ文化や価値観が褒め方に影響しているだけでなく、保護者の応答が変わることで子育てに関する文化や価値観に変化をもたらさう点である（Pomerantz, Ng, Ng, 2020）。

3. 賞賛や評価以外に必要な視点および今後の課題

(1) 無条件の関心（unconditional regard）

ここまで見てきた研究は、当然ながら賞賛に値する言動の存在を前提条件として用意して行われたものである。それに対して加用（2002）は、幼児（2歳2か月から5歳4か月）を突然「すごい」と褒めた際の子どもの反応を分析している。その結果、4歳頃を境にした質的に異なる反応が確認された。2、3歳の子どもでは、唐突に褒められても褒められたこと自体を肯定的に受けとめる姿が確認され、一方4歳以降の子どもでは、唐突に褒められること自体をいぶかしく感じる姿が示された。このことは、無条件に賞賛されることへの捉え方が発達に伴い変化することを示しており、2、3歳の子どもでは無条件（unconditional）に賞賛されること自体が重要で、4歳以降の子どもでは賞賛に値するものがあってこそ賞賛としての意味を持つといえる。

賞賛の対象が具体的な言動そのものやそれを行った人やその人の能力であることを、4歳頃から子どもは理解し始めているといえる。それでは4歳以降の子どもにとって、無条件で賞賛されることに発達的あるいは教育的な意味は無いのだろうか。Brummelman, Thomaes, Walton, Poorthuis, Overbeck, Orobio de Castro, Bushman (2014) は、11歳から15歳までの子ども(平均13.5歳)を対象に、どんな自分であっても受けとめてもらえる「無条件の関心(unconditional regard)」⁽¹⁾の否定的感情に対する緩衝材としての役割を検討している。研究に参加した子どもは、無条件関心群・条件付関心群・統制群の三つにランダムに割り振られた。無条件関心群は、同輩から無条件に自分が受け入れられている場面を想像し、その内容を文章にするよう求められた⁽²⁾(条件付き関心群は条件付きで受け入れられる場面、統制群は顔見知りでない同輩に失敗を見られてしまう場面をそれぞれ文章にするよう求められた)。その3週間後に一学期の成績を受け取った後で、自己否定と他者否定に関する言葉(各5つ)を4件法で回答するオンラインアンケートが実施された。その結果、成績が平均より-1SDの場合、無条件関心群では他の2群よりも自己否定への回答が低く(成績が平均よりも+1SDの場合にそうした特徴は確認されず)、3週間という期間を経ても無条件の関心が自己への否定的感情を軽減する効果が示されている。

Brummelman, Thomaes, Walton et al (2014)の結果は、思春期を迎える時期の(成績表の結果が芳しくなかった)子どもに対して、無条件の関心が自己否定の感情を軽減する役目を果たしていることを明らかにしているが、様々な年齢、自尊感情の高低、所属する文化圏の差異などを考慮した実証的研究は見当たらない。実際、前提条件のない賞賛に対する肯定的反応を示した2,3歳の子ども(加用, 2002)と無条件の関心によって低い成績に起因する自己否定の感情が緩和された思春期の子どもの間には、大きな空白が残されたままである。一方、その空白期間を対象とする評判管理や賞賛の影響に関する研究は、これまで見てきたように多くの研究の蓄積がある。二つの研究を架橋するべく、結果や過程などが問われる賞賛に関する研究と、前提条件なく子どもの存在や行動に関心を寄せる無条件の関心に関する研究が、同一の対象に対して展開していくことが必要である。

(2) 無条件の関心を対象とした研究の諸課題

無条件の関心が子どもに及ぼす影響を発達的に検討するにあたり、最後に方法論も含めて研究上の課題を5点述べていく。

第1の課題は、賞賛に関する先行研究が検討してきたように、他者が示す無条件の関心に対する子どもの受けとめを明らかにしていくことである。この点についてはBrummelman, Thomaes, Walton et al (2014)による思春期を対象とした研究があるものの、同様の方法を幼児や小学生を対象に実施することは難しく、例えば無条件の関心を子どもに伝える方法を考えてそれに対する反応を検証していく必要がある。井上(準備中)は、顔なじみの他者が発する「存

在肯定表現（expression of unconditional regard）」⁽¹³⁾に幼児がどのような反応を示すのかを検討し、パイロット研究であるものの突然の賞賛に対して疑問を呈した4歳以降の子ども（加用，2002）とは異なる様子を確認している。子どもの存在を無条件に肯定する表現の検討はもちろんのこと、Kamiss, Dweck（1999）などが検討対象とした失敗後への影響も今後明らかにしていく必要がある。

第2の課題は、大人が子どもに発している言葉の特徴を実証的に明らかにすることである。第1の課題のような個々の言葉が子どもに及ぼす影響の検討は、日々の生活の言語環境の實際を把握してこそ意味をもつ。神田（2007）は保育者の実践記録を見返した上で、保育者による言葉かけをその目的に応じて「評価語」「共感語」「指示語」「禁止語」「説得語」「質問語」「叙述語」の7つに整理している。その際、子どもの様子を描写する「叙述語」が実践記録の上で相対的に少ないことを指摘し、保育者が子どもを賞賛することを批判的に検討⁽¹⁴⁾している。保育者をはじめとする大人が発する言葉に関して、どのカテゴリーに該当する関わりが多いのかという個々の相対的な比率や頻出場面を検討することは、子どもへの伝わり方を考慮する上で欠かせない。

第3の課題は、子どもへの関わりの背景にある大人が保持する潜在的な認識を明らかにすることである。Brummelman, Thomaes, Overbeek et al.（2014）などの研究によって、保護者は自尊感情が低い子どもに大げさな賞賛を与えることが示されているものの、幼児や保育者を対象とした研究や日本国内での検討はなされていない。大人の子どもの関わりは子どものみならず大人自身にも再帰的影響を及ぼし（Kakinura, Nakai, et al., 2020；Kakinuma, Nishiguti et al., 2020）、大人の価値観や認識が変わることで子どもへの関わり方も変化する（Ng et al., 2021）ことを踏まえると、子どもへの関わり方に影響を及ぼす認識の文化的特徴（Ng et al., 2019）を明らかにすることは実践的にも意義がある。

第4の課題は、無条件の関心という視点から日常的な保育のケアを質的に向上させていくことである。賞賛だけに視点を置くと、誰が誰をどんな場面で褒めたらよいのかという褒め方に議論が偏りがちになる。しかし、存在肯定表現あるいは無条件の関心に視点を置くと、子どもに伝える言葉だけでなく、何気なく行われている日々の関わりの中にその存在意義を再発見されるものが出てくると予想される。保育の営みにおいて、ケアを提供する立場とそれに応じる立場の双方を考慮した検討も可能になるだろう。保育の質が問われている中、教育的側面の質を問うものだけでなく養護つまりケアの側面を充実化させていくことが、保育の専門性を確認する意味でも重要である。

第5の課題は、評判管理の研究を念頭に Botto, Rochat（2019）が指摘している評判に気づき対処するに至るまでの発達過程と無条件の関心の関連を、乳児期からの発達の連続性・非連続性も考慮に入れつつ検討していくことである。

おわりに

ここまでの内容を踏まえて冒頭に紹介した3人の子どもの姿を見つめてみると、それぞれの子どもが示した言動の理解を深めることができる。賞賛や注意のいずれにも「ばか、うんち、くそばばあ」と返答していた3歳の子どものは、神田(2007)が言及しているように評価されること自体に必死の抵抗を示していたのかもしれない。賞賛の中身を考えるだけでなく、日頃から「叙述語」や無条件の関心にどれくらい接しているのか、周囲の大人の認識も含めた検討が求められる。「かわいい」と言われたいがために小学生になりたくないという6歳の子どものは、賞賛だけでは不安を感じる可能性を示唆している。Brummelman, Sedikides (2020) が自尊心の形成には、現実的なフィードバック(現実主義: realism)、自己改善への注目(成長: growth)、無条件の関心(頑丈さ: robustness)の三つが重要であると思春期の子どもを念頭に提起しているように、賞賛が子どもの背中を後押しする条件を発達の明らかなにすることが必要である。周囲から過程や努力の重要性を伝えられても浮かぬ表情をしていた8歳の子どものは、Lam et al. (2008) が明らかにした努力と能力の関係について、努力が能力の低さを物語るという信念を持っているのかもしれない。あるいは Amemiya, Wang (2018) が指摘している努力や過程よりも能力が評価されやすい学校の評価軸を、早い時期から内面化しているのかもしれない。そうであるなら、褒める人への賞賛の再帰的影響(Kakimura, Nakai, et al., 2020; Kakinuma, Nishiguti, 2020)も鑑みて、学校や大人が保持している評価の視点をその価値基準も含めて見直すことが求められる。

〔注〕

- (1) 「いい子 (good kid)」の指示対象には文化差がある。東(1994)は日本とアメリカの保護者が「いい子」に含めるニュアンスの違いを明らかにしている。言葉に対する子どもの受けとめも、文化による違いを明らかにする必要がある。
- (2) Brummelman, Crocker, Bushman (2016) は、「他者の成果物(作品)・振る舞い・特徴に対して、評価者の主観的基準に基づいた言語による肯定的評価を明確にすること」を praise (賞賛) として定義している。しかし、Morris, Zentall (2014) が指摘するようにジェスチャー賞賛も存在するため、必ずしも話し言葉に限定されるものではない。
- (3) ジェンダーによる差はいくつかの研究で報告されている。本稿ですでに言及した Zhao et al. (2018) や Zhao et al. (2020) では、「かしこい」という評判を聞いた時に男児は女児よりも答えを覗き見ることが示されている。また大学生を対象とした研究(Koestner, Zuckerman, Koestner, 1987)において、賞賛がない場合に女性では内発的動機づけが高まるといった影響の差異が示されている。近年では、人種・民族的なマイノリティーが当該文化圏のマジョリティーからの肯定的なフィードバックを、否定的あるいは懐疑的に受けとめることを示す研究結果が得られている(Lawrence, Crocker, Blanton, 2011; Major, Kunstman, Malta, Sawyer, Townsend, Mendes, 2016)。
- (4) Brummelman, Thomaes, Orobio de Castro et al. (2014) では、誰かとの比較によって賞賛を行う「他者比較賞賛 (social comparison praise)」への言及もある。また海外の研究で言及されているものを知らないが、人物賞賛と同様の影響を及ぼすものとして日本ではよく耳にする「さすがお姉ちゃん/お

兄さんね」「さすが○組さん／□年生だね」といった「役割賞賛（role praise）」を想定することも可能であろう。

- (5) 一方、欧米圏の子どもを対象とした Baker, Graham (1987) では、8歳から9歳を境目に努力の多さと能力の低さが関連すると見なすようになる研究結果が得られている。努力が何を象徴するのは文化によって異なる可能性がある。
- (6) Brummelman, Sedikides (2020) や伊田 (2009) のように、ここで言及されているナルシズムを他の類型も意識しながら相対化する必要がある。
- (7) “Saying is believing” とは、「情報の送り手が受け手の態度などを考慮して情報伝達を行った結果、伝達内容に対応する形で情報の送り手自身の認知が影響を受ける現象（菅, 2018, p.93）」である。
- (8) Dweck (2017) は、「努力、方略、そして他者の手助けによって自らの基本的素質を開拓していくことができる (p.7)」という信念に基づくものを「成長マインドセット (growth mindset)」, 「自らの素質は変更不能である (p.6)」という信念に基づくものを「固定マインドセット (fixed mindset)」と呼んでいる。
- (9) こうした「失敗を意識した応答」に関わって、教師（保育者）による批評 (criticism) の受けとめに日本とイタリアの幼児（6歳）では差があることが示されている (Mizokawa, Lecce, 2017)。「心の理論 (theory of mind)」における二次の誤信念課題と批評の受けとめの関連を検討した結果、「心の理論」の発達状況にかかわらず日本の子どもはイタリアの子どもに比べて教師（保育者）からの批判を前向きに受け止めていることが分かった。
- (10) Pomerantz, Ng, Ng (2020) は、米中の違いを以下のように整理している。アメリカは個人の自立を志向するため他者と区別される個人が強調され、肯定的な自分への関心 (self-regard) は適応の基盤と見なされるため、子どもの能力を褒める傾向が強くなる。他方、中国では社会的な関係、役割、義務といった文脈の中で他者へ依存を志向し、集団の中での調和や責任が優先される。また、儒教の影響から個人の絶え間ない努力が期待されるため、子どもの不十分な点を指摘して改善を求める傾向が強くなる。
- (11) 評価されることなく条件なしに他者に受容されている感覚のことを指し、Rogers (1961) の「無条件の肯定的関心 (unconditional positive regard)」と同義で用いられている。
- (12) Brummelman, Thomaes, Walton et al. (2014) では14歳の少女が書いた無条件関心条件での例が紹介されている。「私は友だちと一緒に課題に取り組んでいました。そして、私はたくさん間違いをしていました。けれども私たちはまだいい友だちです、彼女はそれでも私を認めてくれています。」
- (13) 井上（準備中）では「大好きだよ」を存在肯定表現として用いている。
- (14) 保育者の賞賛に子どもが反発する場合、評価されることそのものを拒んでいる可能性があり、そうした時には遊びの様子や状況を具体的に表現する叙述語を介することで、子どもと大人が三項関係的につながっていく可能性が言及されている。

〔文献〕

- Abadi, J., Miklosi, A. (2016) The origin of social evaluation, social eavesdropping, reputation formation, image scoring or what you will. *Frontiers in Psychology*, 7:1772. doi: 10.3389/fpsyg.2016.01772
- Amemiya, J., Wang, M-T. (2018) Why effort praise can backfire in adolescence. *Child Development Perspective*, 12 (3), 199-203.
- 東洋 (1994) 「日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて」東京大学出版会。
- 青木直子 (2005) ほめることに関する心理学的研究の概観, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 52, 123-133.
- 青木直子 (2009) 小学1年生のほめられることによる感情反応：教師と一対一の場合とクラスメイトがいる場合の比較, 発達心理学研究, 第20巻第2号, 155-164.

- 青木直子 (2012) 小学校1～3年生の自然場面におけるほめられた体験のとらえ方：ほめられた場面に存在する要因とその働き, 発達心理学研究, 第23巻第3号, 320-330.
- Baker, G. P., Graham, S. (1987) Developmental study of praise and blame as attributional cues. *Journal of Educational Psychology*, 79 (1), 62-66.
- Bornstein, M. C., Putnick, D. L., Park, Y., Suwalsky, J. T. D., Haynes, O. M. (2017) Human infancy and parenting in global perspective: specificity. *Proceedings of the Royal Society B*. 284: 2017216820172168. <http://doi.org/10.1098/rspb.2017.2168>
- Botto, S. V., Rochat, P. (2018) Sensitivity to the evaluation of others emerges by 24 months. *Developmental Psychology*, 54, 1723-1734.
- Botto, S. V., Rochat, P. (2019) Evaluative audience perception (EAP): How children come to care about reputation. *Child Developmental Perspectives*, 13 (3), 180-185.
- Brummelman, E. (Ed.) (2020) *Psychological Perspective on Praise*. New York, NY: Routledge.
- Brummelman, E., Crocker, J., Bushman, B. J. (2016) The praise paradox: When and why praise backfires in children with low self-esteem. *Child Development Perspectives*, 10 (2), 111-115.
- Brummelman, E., Nelemans, S. A., Thomaes, S., Orobio de Castro, B. (2017) When parents' praise inflates, children's self-esteem deflates. *Child Development*, 88 (6), 1799-1809.
- Brummelman, E., Sedikides, C. (2020) Raising children with high self-esteem (But not narcissism). *Child Development Perspectives*, 14 (2), 83-89.
- Brummelman, E., Thomaes, S., Orobio de Castro, B., Overbeek, G., Bushman, B. J. (2014) "That's not just beautiful-That's incredibly beautiful": The adverse impact of inflated praise on children with low self-esteem. *Psychological Science*, 25 (3), 728-735.
- Brummelman, E., Thomaes, S., Overbeek, G., Orobio de Castro, B., Van den Hout, M. A., Bushman, B. J. (2014) On feeding those hungry for praise: Person praise backfires in children with low self-esteem. *Journal of Experimental Psychology*, 143 (1), 9-14.
- Cimpian, A., Arce, H. M. C., Markman, E. M., Dweck, C. S. (2007) Subtle linguistic cues affect children's motivation. *Psychological Science*, 18, 314-316.
- Dore, B. P., Morris, R. R., Burr, D. A., Picard, R. W., Ochsner, K. N. (2017) Helping others regulate emotion predicts increased regulation of one's own emotions and decreased symptoms of depression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 43 (5), 729-739.
- Dweck, C. S. (2017) *mindset: Changing the way you think to fulfil your potential*. London: Robinson.
- Foster-Hanson, E., Cimpian, A., Leshin, R. A., Rhodes, M. (2020) Asking children to "be helpers" can backfire after setbacks. *Child Development*, 91 (1), 236-248.
- Fu, G., Heyman, G. D., Lee, K. (2016) Learning to be unsung heroes: Development of reputation management in two cultures. *Child Development*, 87 (3), 689-699.
- Fu, G., Heyman, G. D., Qian, M., Guo, T., Lee, K. (2016) Young children with a positive reputation to maintain are less likely to cheat. *Developmental Science*, 19 (2), 275-283. <http://dx.doi.org/10.1111/desc.12304>
- Henderlong, J., Lepper, M. R. (2002) The effects of praise on children's intrinsic motivation: A review and synthesis. *Psychological Bulletin*, 128 (5), 774-795.
- Heyman, G. D. (2020) Praise and the development of reputation management. In E. Brummelman (Ed.), *Psychological Perspective on Praise* (pp.111-118). New York, NY: Routledge.
- Higgins, E. T., Rholes, W. S. (1978) "Saying is believing": Effects of message modification on memory and liking for the person described. *Journal of Experimental Social Psychology*, 14, 363-378.
- 伊田勝憲 (2009) エリクソンの第IV段階 "industry" 再考：劣等感と仮想的有能感から, 心理科学, 第30巻第1号, 31-43.

井上洋平（準備中）「存在肯定表現」に対する幼児の反応。

- Janis, I. L., King, B. T. (1954) The influence of role playing on opinion change. *Journal of Abnormal Psychology*, 49 (2), 211-218.
- Kakinura, K., Nakai, M., Hada, Y., Kizawa, M., Tanaka, A. (2020) Praise affects the “Praisers”: Effects of ability-focused vs. effort-focused praise on motivation. *The Journal of Experimental Education*, <https://doi.org/10.1080/00220973.2020.1799313>
- Kakinuma, K., Nishiguti, F., Sonoda, K., Tajiri, H., Tanaka, A. (2020) The negative effect of ability-focused praise on the “praiser’s” intrinsic motivation: Face-to-face interaction. *Frontiers in Psychology*, 11:562081, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.562081>
- Kamiss, M. L., Dweck, C. S. (1999) Person versus process praise and criticism: Implications for contingent self-worth and coping. *Developmental Psychology*, 35 (3), 835-847.
- Kelsey, C., Grossmann, T., Vanish, A. (2018) Early reputation management: Three-year-old children are more generous following exposure to eyes. *Frontiers in Psychology*, 9:698, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2018.00698>
- Koestner, R., Zuckerman, M., Koestner, J. (1987) Praise, involvement, and intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53 (2), 383-390.
- Gundersen, E. A., Gripshover, S. J., Romeo, C., Dweck, C. S., Goldin-Meadow, S., Levine, S. C. (2013) Parent praise to 1- to 3-year-olds predicts children’s motivational frameworks 5 years later. *Child Development*, 84 (5), 1526-1541.
- 神田英雄 (2007) 「保育に悩んだときに読む本：発達のドラマと実践の手だて」 ひとなる書房.
- 加用文男 (2002) 幼児のプライドに関する研究, 心理科学, 第23巻第2号, 17-29.
- Lam, S., Yim, P., Ng, Y. (2008) Is effort praise motivational? The role of beliefs in the effort-ability relationship. *Contemporary Educational Psychology*, 33, 694-710. doi:10.1016/j.cedpsych.2008.01.005
- Lawrence, J. S., Crocker, J., Blanton, H. (2011) Stigmatized and dominant cultural groups differentially interpret positive feedback. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 42 (1), 165-169.
- Lee, H. I., Kim, Y., Kesebir, P., Han, D. E. (2017) Understanding when parental praise leads to optimal child outcomes: Role of perceived praise accuracy. *Social Psychological and Personality Science*, 8 (6), 679-688.
- Ma, F., Zeng, D., Xu, F., Compton, B. J., Heyman, G. D. (2020) Delay of gratification as reputation management. *Psychological Science*, 31 (9), 1174-1182.
- Major, B., Kunstman, J. W., Malta, B. D., Sawyer, P. J., Townsend, S. S. M., Mendes, W.B. (2016) Suspicion of motives predicts minorities’ responses to positive feedback in interracial interactions. *Journal of Experimental Social Psychology*, 62, 75-88.
- 溝川藍 (2018) 「日本の発達心理学」の発信, 発達心理学研究, 第29巻4号, 172-180.
- Mizokawa, A., Lecce, S. (2017) Sensitivity to criticism and theory of mind: A cross cultural study on Japanese and Italian children. *European Journal of Developmental Psychology*, 14 (2), 159-171.
- Morris, B. J., Zentall, S. R. (2014) High fives motivate: the effects of gestural and ambiguous verbal praise on motivation. *Frontiers in Psychology*, 5:928. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2014.00928>
- Muller, C. M., Dweck, C. S. (1998) Praise for intelligence can undermine children’s motivation and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75 (1), 33-52.
- Ng, J., Ng, F-Y., Pomerantz, E. M. (2021) Mother’s goals influence their responses to children’s performance: An experimental study in the United States and Hong Kong. *Child Development*, <https://doi.org/10.1111/cdev.13554>
- Ng, J., Xiong, Y., Qu, Y., Cheung, C., Ng, F. F-Y., Wang, M., Pomerantz, E. M. (2019) Implications of Chinese and American mother’s goal for children’s emotional distress. *Developmental Psychology*, 55 (12), 2616-

2629.

- 奥村優子・池田彩夏・小林哲生・松田昌史・板倉昭二 (2016) 幼児は他者に見られていることを気にするのか：良い評判と悪い評判に関する行動調整. 発達心理学研究, 第27巻第3号, 201-211.
- Pomerantz, E. M., Ng, J., Ng, F. F.-Y. (2020) The role of culture in parents' responses to children's performance. In E. Brummelman (Ed.), *Psychological Perspective on Praise* (pp.140-147). New York, NY: Routledge.
- Qin, W., Zhao, L., Compton, B. J., Zheng, Y., Mao, H., Zheng, J., Heyman, G. D. (2021) Overheard conversation can influence children's generosity. *Developmental Science*, 24:e13068, <https://doi.org/10.1111/desc.13068>
- Rapp, D. J., Engelman, J. M., Herrmann, E., Tomasello, M. (2018) Young children's reputational strategies in a peer group context. *Developmental Psychology*, 55 (2), 329-336.
- Reissland, N. (1994) The socialization of pride in young children. *International Journal of Behavioral Development*, 17, 541-552.
- Repacholi, B. M., Meltzoff, A. N. (2007) Emotional Eavesdropping: infant Selectively Respond to Indirect Emotional Signals. *Child Development*, 78 (2), 503-521.
- Rogers, C. R. (1961) *On Becoming a Person: A Therapist's View of Psychotherapy*. Boston, NY: Houghton Mifflin Company.
- Skipper, Y., Douglas, K. (2012) Is no praise good praise? Effects of positive feedback on children's and university students' response to subsequent failures. *British Journal of Educational Psychology*, 82, 327-339.
- 菅さやか (2018) 社会的認知領域における言語コミュニケーション研究の概観と今後の展望. 哲学, 第140集, 73-111.
- 高崎文子 (2018) 「ほめへの態度」の発達的变化とその関連要因の検討. 発達心理学研究, 第29巻第1号, 13-21.
- Tomasello, M. (2016) *Natural History of Human Morality*. Harvard University Press. 中尾央 訳 (2020) 「道徳の自然誌」勁草書房.
- Zentall, S. R., Morris, B. J. (2010) "Good job, you're so smart": The effects of inconsistency of praise type on young children's motivation. *Journal of Experimental Child Psychology*, 107, 155-163.
- Zentall, S. R., Morris, B. J. (2012) A critical eye: Praise directed toward traits increases children's eye fixations on errors and decreases motivation. *Psychonomic Bulletin & Review*, 19, 1073-1077.
- Zhao, L., Chen, L., Sun, W., Compton, B. J., Lee, K., Heyman, G. D. (2020) Young children are more likely to cheat overhearing that classmate is smart. *Developmental Science*, 23:e12930, <https://doi.org/10.1111/desc.12930>
- Zhao, L., Heyman, G. D., Chen, L., Lee, K. (2018) Telling young children they have a reputation for being smart promotes cheating. *Developmental Science*, 21:e12585, <https://doi.org/10.1111/desc.12585>

〔付記〕

本稿の検討にあたり、「存在肯定表現」に関する研究の実践的価値を大いに認め、的確な助言や励ましの言葉をくださった渡邊保博先生（元佛教大学社会福祉学部教授）に心より感謝いたします。

(いのうえ ようへい 社会福祉学科)

2021年11月15日受理

